

今週のメニュー

■ [トピックス](#)

◇PVC News No.102 を発行しました

塩化ビニル環境対策協議会

■ [随想](#)

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(29)

木下 清隆

■ [トピックス](#)

◇PVC News No.102 を発行しました

塩化ビニル環境対策協議会

11月10日に塩化ビニル環境対策協議会(JPEC)は [PVC News No.102](#) を発行しました。今号は、「生活や福祉用品」をテーマにしています。構成は以下の通りです。

◎ **【特集】福祉と塩ビ製品**

○ 巻頭インタビュー

製品開発に現場の声を。重要なのはメーカーと施設のコラボ

武蔵野大学通信教育部人間科学科 教授 本多 勇 氏 (社会福祉士 保育士)

○ レポート1

アロン化成(株)の介護用品ブランド「安寿」

高齢者の自立支援、介護者の負担軽減を追求する多彩な製品群

○ レポート2

田島ルーフィング(株)の塩ビ床シート

品揃え大幅改訂。ノーワックスメンテ&抗菌性能で福祉・介護向けに

○ レポート3

「空気のカ」が介護を支える。(株)ハイビックスの近況

溶着技術を駆使して「空気をカタチに」。介護用プラ製品、さらに多彩に

◎ **リサイクルの現場から****塩ビ壁紙丸ごとリサイクル。工事現場の安全マットに！**

鹿島と照和樹脂のタッグで、壁紙リサイクルに新たな道

◎ **インフォメーション1****熊本地震被災塩ビ管のリサイクル管が話題に**

耐震性、耐久性のPRも。「下水道展 '17 東京」で(塩化ビニル管・継手協会)

◎ **インフォメーション2****PVC アワード受賞作品「Maru Maru Necklace」リニューアルして商品化 実現**

東京五反田の合同展示会で新たなパズルネックレスを紹介！

◎ 塩ビ最前線

汎用塩ビシートのがけ・又永化工(株)の新たな挑戦

トランプ、カード、食品容器にも。塩ビ復権をめざして多彩な用途開発

登場掲載記事をご紹介します。

今号は福祉と塩ビ製品をテーマとして取り上げました。

まず巻頭インタビューとして武蔵野大学通信教育部人間科学科 教授 本多先生にお話を聞きました。本多先生は大学で教鞭をとり、そして支援相談員として介護の現場に立っておられます。介護保険制度がスタートしてから現在までの変化や、今直面している問題点などについて語って頂きました。

レポート1から3までは実際使われている製品について取材しました。

入浴用のいすやポータブルトイレを製造しているアロン化成(株)の介護用品ブランド「安寿」。福祉施設などの床で使用されている田島ルーフィング(株)の塩ビ床シート。空気ので介護を支えるリハビリ用品を製造している(株)ハイビックス。

それぞれ福祉介護現場でのプラスチック製品ならではの特色を生かしています。

リサイクルの現場は塩ビ壁紙のリサイクルを取材しました。

鹿島建設(株)と(株)照和樹脂が協同で、廃壁紙を工事現場の安全マットにリサイクルする仕組みを構築しました。

『PVC ニュース』は [JPEC のホームページ](#) から、最新号、バックナンバー共にご覧いただけます。

ご講読を希望される方は、[こちら](#)まで、送付先・TEL・希望部数などをご連絡下さい。

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(29)

木下 清隆

<前回とのつながり>

前回までに、大若子命と梅宮大社との関係から、大若子命が奈良時代、平安時代を通じて、時の権力者の女性達に大いに尊崇されてきたことを明らかにした。以下は、寄り道的に話を変え、豊受大神宮、即ち、伊勢神宮外宮の問題について、簡単に論じることにする。この外宮の何が問題なのかであるが、それはその祭神である。古来、雄略天皇の時代に丹波から豊受大神を招いたと伝承されているが、古代史の学者達はそんなことを真に受けるはずがない。ここでは、最初に岡田精司氏の考えを紹介し、これに反論する形で祭神問題を論考して行くことにする。

10 豊受大神宮

先に岡田精司氏の説として、

「度会氏は伊勢度会の地で代々、太陽神とも云うべき天日別命を祖先神として祭祀していた。その後、大王家の太陽神の伊勢鎮座により、初代の大神主として度会氏の祖

である大幡主命がこの太陽神に仕え、祭祀の過程から度会氏の祭神、天日別命はいつしか御饌都神で女神である豊受神に変化していった。」

といった内容を紹介した。ところが、その後の検討で天日別命は伊勢氏の祖であって、度会氏の祖ではないことが明らかになってきた。このような結論になると度会氏は天日別命を祀ってはいなかったことになる。

それでは彼らは何を祭祀していたのだろうか。まず考えられることは彼らの守護神である。外宮の裏にあるとされる高倉山山頂の古墳は明らかに祖先の墓であり、この付近一帯は度会氏の祖霊を祭祀する場所であったと考えられる。従って、ここに併せて彼らの守護神が祀られていたとしても、これは当然のことと考えられる。この守護神は、先にも紹介したが岡田氏をはじめ多くの見解として、太陽神が考えられている。しかし、太陽神だとすると、この神がその後御饌都神に変化していくのには無理があるといえる。

度会氏が祭祀していたのは天日別命ではないが、とにかく太陽神であったとすると、この神が御饌都神にされることに対して、度会氏の方からかなりの抵抗があったとしてもおかしくないはずである。ところがそのような痕跡はなく、『止由気宮儀式帳』には丹波から豊受神を招いたことが、何の抵抗も無いといったように記されている。この儀式帳が太政官に提出されたのが延暦二十三年(八〇四)のことなので、それまでの長い歴史の中で心のわだかまりが風化していったとも考えられるが、何か釈然としないものは残る。

そこで今までの太陽神祭祀といった既成の考え方を捨ててみることにする。そして本当に古代の人々が願ったであろうことを想定してみると、彼らが祈る思いで祭祀した対象は、太陽神ではなく、豊かな稔りをもたらしてくれる穀物神だったのではないかと考えられることになる。このように祭祀の対象を変えてみると、この神が御饌都神に移行することには何の抵抗も無いことになる。それでは度会の地での穀物神信仰はあり得るのが問題となるが、以下、これについて検討してみることにする。

この問題に一つの解答を出しているのは、泉谷康夫氏である。氏は「記紀神話形成の一考察」(『日本書紀研究』第1冊 一九六四、所収)の中で、

「穀霊信仰によって成立したと考えられる天孫降臨神話において降臨を司令した本来の神が高皇産霊尊だったことや、新嘗の儀式が本来は穀霊信仰に基づくものだったことは、日神信仰の前に穀霊信仰のあったことを示すものである。従って私は、応神から継体にかけて大和朝廷では穀霊信仰が専ら行なわれ、日神に対する信仰は殆どみられなかったと考えている。」(四十六 p)

と述べている。この引用文の論考部分は長くなるので、要約して示すと次のようになる。



伊勢神宮 外宮
御祭神：豊受大御神



別宮：多賀宮 (遷宮前)
御祭神 豊受大御神荒御魂

- ① 『古事記』に記載されている天皇の和風諡号^{しごう}を調べると、神武天皇から神功皇后までは殆どの天皇に「日子」が使われている。ところが景行から神功までの系譜は七世紀前半に作成され、開化以前の系譜は七世紀後半以降に作成されたものとされている。従って、神武から神功までの諡号に日神信仰の反映があるとしても、それがそのまま歴史的事実であり、日神に対する信仰が大和朝廷成立の当初より行われたことにはならない。
- ② 応神以降の諡号には素朴で固有名詞と思われる名前が並んでおり、継体に至るまでの間、日神信仰と関係のあるような名称は見当たらない。更に、『古事記』に見える皇女名を調べると、景行以前が「日売」となっているのに対し、応神以降の皇女の殆どは「郎女」^{いらつめ}となっている。このような『古事記』の記載内容から見て、応神から継体にかけては日神信仰ではなく、穀霊信仰が行なわれていたものと考えられる。

この他に泉谷氏が触れていないことを補足すると、「日神」が『日本書紀』の中で登場するのは殆どが、神代巻でありそれも素戔嗚尊と天照大神とが誓約して皇孫を生み出す天真名井神話の一書中である。ここでは天照大神の替わりに「日神」が使用されている。その後は、ずっと飛んで用明天皇の即位前期と元年(五八六)である。そこでは、— 酢香手姫皇女を以って、伊勢神宮に拝して、日神の祀りに^{つかへまつ}奉らしむ — と記載されている。この条で、伊勢神宮の神が天照大神ではなく、日神となっている点は注目される。更に太陽神を祀るとされる日祀部^{ひのまつりべ}が置かれたのが、用明の前の時代である敏達六年(五七七)二月とされていることから、このころ「日神信仰」が天皇家の中に定着していったと見ることはできよう。

従って、「日子」のつく天皇諡号が神武から応神以前まで続くということは、これらの諡号が六世紀以降に作成された可能性が高いことを意味している。なお、「日子」は書紀においては、全て「彦」に変更されている。以上のような泉谷氏の所説と補足検討から、「日神信仰」が比較的新しく「穀霊信仰」のほうが古いとの見解は、相当に妥当性があるものと云えよう。



伊勢神宮 外宮

従って、このような見解が正しいとすると、伊勢の山田で度会氏が祭祀していたのは穀神であった可能性が高いことになる。そうであれば初めに想定したようにこの穀神が豊受神に変化したとしても、それは自然な成り行きであり、度会氏にとってはむしろ歓迎すべきことだったことになる。さらに今までは度会氏の一族の守護神に過ぎなかったものが、大王家祖先神の御饌都神となったことは、彼らにとって誇りであったに違いない。しかも彼らは「外宮先祭」の栄誉まで勝ち得た。荒木田氏が登場してくるまでの間、度会氏は得意の絶頂にあったはずである。以上のような検討結果から、

- 度会氏が伊勢度会の地で代々祭祀していたのは、太陽神ではなく、穀神であった。その後、天照大神の伊勢鎮座により、この穀神はいつしか御饌都神^{みけつのかみ}と称されるようになり、女神豊受神へと変化していった — と結論されよう。

伊勢の櫛田神社と大若子命については以上で一応論じ終わったので、今度は博多の櫛田神社に係わる問題に話を移すことにする。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



■ 東京都中央区新川 1-4-1

■ TEL 03-3297-5601 ■ FAX 03-3297-5783

■ URL <http://www.vec.gr.jp> ■ E-MAIL info@vec.gr.jp
